



Title	中近世物語絵画の研究―大名家確立期の需要拡大と制作者の多様化をめぐって―
Author(s)	龍澤, 彩
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105373
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (龍澤 彩)	
論文題名	中近世物語絵画の研究 -大名家確立期の需要拡大と制作者の多様化をめぐって-
論文内容の要旨 本論文は、中近世移行期のやまと絵、とりわけ十七世紀の物語絵画（物語絵）の特質を、主題・媒体・享受者層の各要素に着目して明らかにすることを目的とする。作品数の増加と主題の多様化という点で、十七世紀を物語絵画の最盛期として位置付け、その出現の大きな要因として、近世大名家における絵画需要を想定する。十七世紀は、大名家が各家にふさわしい「大名道具」を整えていく時期にあたり、婚礼や代替わり等に関わって多数の作品が必要とされ、たとえば『源氏物語』や『平家物語』に取材する絵画については、土佐派や狩野派といった正系の絵師のみならず、町絵師と呼ばれる新興の絵師も含めて多彩な描き手が携わる制作環境の多様化と拡大が起こった。作品としては、前時代からの主題や場面選択を継承しつつ、同時代の流行も取り込んで新たな図様が生まれるなど、物語絵表現のバリエーションも大きく広がった。さらに、『竹取物語』や様々な御伽草子など、この時期に絵画化されたことで改めて見出され、後世に読み継がれた物語も数多く、それによって物語絵画の主題そのものも、実に多様となっている。こうした事象の背景としては、近世初期の幕藩体制の整備とともに高まった大名道具・調度としての絵画の需要、それを可能にした武家階級の財力なども想定すべきである。それらがあいまって、十七世紀は日本美術史上、物語絵画が量産され、多彩なありようを示した最後のピークとなったのである。 本論文は、そのような物語絵画最盛期の諸相を、現存作例と文献資料の分析を主な方法として論じる。物語絵の生成環境に、近世大名家が与えた影響を提示することを主眼とするため、大名家伝来作品を研究対象とすると同時に、町絵師・絵草紙屋による作品にも焦点をあてる。逸名絵師の作品は、主題や表現の面で、狩野派や土佐派などの正系絵師作品に範を取る場合が多い。そうした作者未詳の作例は、規範となる作品を最上層として、裾野が広がっていく「階層化」を示しており、当時の物語絵における需要と供給の様相を映す史料であるとも言える。 序論では、各部・各章で扱う内容に関連する研究の動向を概括した。この時代の絵画史、やまと絵研究は、主として画派研究・絵師研究の形で展開してきている。パトロンや享受者に着目した研究に進展はあるものの、特定の絵師の筆に帰することが難しい作品は周縁的なものとして扱われる傾向があり、そうした作例から読みとれる情報が美術史研究に十分に活かされていないという問題を指摘した。本論文では、この問題意識のもと、画派研究の手法には拠らず、各事例研究において中世からの継承と十七世紀の特色を読み解くことを通底させた。 第一部「物語絵画の主題・媒体・表現—小画面絵画を中心に」では、扇絵や料紙装飾といった特色ある媒体と、屏風絵など大画面絵画の間の主題や表現技法の往還が、十七世紀物語絵の素地を作ったことを論じた。第一章「中世扇面画から近世やまと絵系屏風へ—主題と表現の継承」では、扇という媒体の特色を確認し、それらの流布・普及が、「武蔵野図」や「柳橋水車図」などのやまと絵屏風の成立を用意したことを述べた。第二章「扇と物語絵画」では、第一章で見た扇絵の「脱コンテキスト」性が、例えば『源氏物語』から「若紫」という個別の画題が分化し、「名場面」が視覚化されていく現象を促した可能性を指摘した。第三章「図様・表現の共有と拡散—料紙装飾・扇面画・絵入版本」では、まず、作品の基盤となる料紙の装飾について、中近世に特徴的な金銀泥絵の主題と表現が、画面形式を超えて共有されていることを確認した。また、扇絵という媒体において生み出された多様な画題と集積したイメージが継承され、版本の挿絵に活用されていく様相を論じた。続く第四章・第五章では、「鼠の婚礼」を主題とする複数の御伽草子絵巻をとりあげて、中近世移行期の物語絵巻の表現の変遷の一端を確認した。第四章「転換期の物語絵巻—甲子園学院所蔵「鼠の草子絵巻」」では、十七世紀初頭に制作された「鼠草子絵巻」が、室町時代の先行作例に倣いつつも、慶長・元和期の時代性を明確に表していることを絵画表現から読み解いた。第五章「絵巻と画中詞」では、室町時代の御伽草子絵巻に顕著な画中詞表現の消長に着目し、十七世紀には絵巻という媒体に求められる表現と機能の変容していたことを推定した。 続く第二部・第三部は、画題別に、媒体・主題・受容環境（享受者層）の相互影響を論じた。まず第二部の「近	

世源氏絵の諸相」では、『源氏物語』を絵画化した源氏絵について、第一部で確認した媒体ごとの特性にも注目しつつ、十七世紀の時代性を確認した。第六章「扇に描かれた源氏絵」では、源氏絵扇面画の現存作例をとりあげ、特に、表裏のある媒体における表現の特徴を論じた。続く第七章「『源氏物語冊子表紙絵模本』からみる土佐光信の源氏絵」は、住吉具慶による「源氏物語冊子表紙絵模本」（東京国立博物館蔵）の全容を紹介し、原本は失われているものの、土佐光信の源氏絵図様を伝えている可能性があることを指摘し、表紙・裏表紙の組み合わせの復元を試みた。第八章「土佐派の小画面源氏絵と「光則様式」の拡がり」では、土佐光則様式の源氏絵色紙への需要が高かったことを現存作例から論じ、土佐派正系の表現と図様が派生していく状況を確認した。第九章・第十章では十七世紀に制作された「源氏物語絵巻」を取りあげた。第九章「将軍家・毛利家伝来「源氏物語絵巻」」では、毛利博物館所蔵「源氏物語絵巻」の伝来を明らかにし、図様は室町時代の源氏絵扇面から継承している部分があること、表現としては土佐光茂の様式が認められることを指摘した。第十章「メトロポリタン美術館蔵「源氏物語絵巻」」では、従来海北友雪筆とされてきた当該絵巻の制作年代が、詞書筆者目録の検討から、友雪の時代からはやや下ることを明らかにした。十七世紀の源氏絵の特徴は、前時代の扇面画・色紙絵・冊子表紙絵などの小画面絵画による図様の流布を経て、版本挿図という新たな媒体の影響も受けつつ制作された点にあることを論じた。

第三部「武家の物語絵画—平家絵・合戦絵・御伽草子絵」では、『平家物語』や御伽草子などの、「武家の物語」の絵画作例を取りあげた。第十一章「大名家における「武家の物語」の所有」では、現存作例に加えて、尾張徳川家の蔵帳（道具目録）や、旧大名家のコレクションを示す売立目録なども利用しつつ、大名家において、武士の活躍を主題とする物語絵が多く収蔵されていた状況を確認した。第十二章「尾張徳川家伝来「平家物語図扇面」」と第十三章「「武者絵小型扇面」の拡がり」では、土佐光則の細密様式が用いられた小型扇面という形式（媒体）が評価されることにより、異なる制作環境でも類品が制作される「階層化」が見られることを確認した。第十四章「「源平合戦図屏風」の展開—智積院所蔵「一の谷合戦図屏風」」・第十五章「今治市河野美術館所蔵「源平合戦図屏風」」では、屏風絵と絵入版本や絵巻などとの相互影響を検討することにより、「源平合戦」という画題は、特に、複数名による鑑賞が可能な屏風という形式において普及したことを論じた。第十六章「黒田家伝来「酒吞童子絵巻」」では、フリーア美術館所蔵「酒吞童子絵巻」が、狩野元信筆「酒傳童子絵巻」（サントリー美術館所蔵）を規範として、大名の黒田家によって制作が企図された作品であったことを明らかにした。第十七章「尾張徳川家伝来「羅生門絵巻」」では、「羅生門絵巻」（東洋大学図書館所蔵）について、諸本対照を通じて作品の特色を検討し、当該絵巻を、尾張家における「清和源氏の物語」重視の価値観を示す事例として位置付けた。

第四部「尾張徳川家の物語絵画コレクション」では、特に絵草子屋作品（奈良絵本）に着目した。第十八章「尾張徳川家伝来の物語絵画」では、現存作例と蔵帳に見られる物語絵作品を整理し、婚礼調度本の可能性がある「藤袋草子絵巻」について詳述した。第十九章「近世前期の物語絵巻と制作環境—絵草子屋作品の再評価」では、尾張徳川家伝来の「文正草子絵巻」を最上位の品質を示す基準作品として位置付け、比較の結果、高野山龍光院所蔵「承久記絵巻」、海の見える杜美術館所蔵「武家繁昌絵巻」、共立女子大学所蔵「竹取物語絵巻」など多数の作品が同一工房作と見なせることを明らかにした。あわせて、従来の美術史研究では主たる研究対象とされてこなかった「奈良絵本」と呼ばれる絵巻群が、徳川家綱の治世における絵画、絵巻に対する価値観を反映している可能性を示した。第二十章「尾張徳川家伝来作品にみる「表」と「奥」—徳川義直関与の事例から」では、尾張徳川家の「大名道具」から、初代義直に関する作例をとりあげた。公的な意味をもつ表道具である「八幡大菩薩像」は藩祖崇拝とも関わって、同家では象徴的な意味をもち続けた絵画であり、また、より私的な環境で制作された「奥」の道具である「合貝」の絵は、小さな媒体ながら、当時の大名家で共有されていたやまと絵、物語絵のバリエーションを示す一事例であることを指摘した。

無論、続く十八世紀以降も絵巻・絵本は制作されてはいるが、十七世紀ほどの制作点数の増加と画題の急激な多様化は見られない。「階層化」の観点で言えば、最上層の狩野派や土佐派などの正系絵師の作品に規範性・影響力があったことは確かであるものの、一方で、数量的に最もボリュームのある層は町絵師・絵草子屋の作品群である。いわば「マス層」であるにも関わらず、従来の画派論を基調とする研究では、絵画史上の位置づけやその存在理由は明確に論じられてこなかった。本研究は、多様な作例を生み出した、中世から近世の物語絵生成環境の変容が、近世大名家の勃興と確立という大きな潮流と紐付けられることを明らかにした上で、この時期の現存作例を理解するための一つの指標・モデルを提示した点において、今後の近世絵画史研究に資するものである。加えて、物語絵画史は物語受容史でもあり、本研究は絵画史と文学史を架橋するという意義ももつ。十七世紀の物語絵生成環境は、いわば十七世紀の新たな《古典》創出のシステムであり、後世の《古典》概念がどのように形成されたかという、より高次の問題へとつながるだろう。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (龍 澤 彩)	
論文審査担当者	(職) 氏 名
	主 査 大阪大学 教授 門脇 むつみ
	副 査 大阪大学 教授 藤岡 穰
	副 査 立教大学 教授 鈴木 彰
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 中近世物語絵画の研究 ―大名家確立期の需要拡大と制作者の多様化をめぐって―

学位申請者 龍澤 彩

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	門脇 むつみ
副査	大阪大学教授	藤岡 穰
副査	立教大学教授	鈴木 彰

【論文内容の要旨】

本論文は、中近世移行期、とりわけ 17 世紀の物語絵画を対象とする。この時期は日本美術史上、物語絵画の主題、媒体、享受者、制作者が多様化し、数多くの作品が制作された最盛期とみなせるが、その大きな要因を近世大名家における「道具」としての絵画の整備が需要の拡大を導いた状況に求める。その上で、享受者層に将軍家、大名家、富裕な町衆など、制作者層に狩野派や土佐派などの正統的職業絵師から地方の御用絵師、逸名絵師、絵草紙屋などの「階層」があるとして、具体的な作品と文献資料の分析に基づき、17 世紀の物語絵画の制作と需要の状況を立体的に提示する。序論、終章と 4 部（20 章）から構成され、本文と詞書翻刻ほか資料をあわせて約 330000 字、それに図版篇を伴う。

序論は、各章で扱う研究動向を概括した上で、物語絵画を含むこの時代の絵画、やまと絵研究が画家、画派を中心になされてきたことを示し、問題の所在と本論文の目的を説く。第一部「物語絵画の主題・媒体・表現—小画面絵画を中心に」は、扇絵や料紙装飾といった特色ある媒体と屏風絵など大画面絵画の間の主題や表現技法の往還、物語から名場面が抜き書きされ「脱コンテキスト」化されていく様相、料紙装飾の様式と媒体の関係、「鼠の草子絵巻」を題材に画中詞の問題を検討する。第二部・第三部は、画題別に、主題、媒体、享受者層の相互影響を論じる。第二部「近世源氏物語絵の諸相」は、土佐派を中心とする作品を取り上げ、従来の見解の再検討を行い、新しい画家像の提示や画面の大きさによる図様や構図の変容、狩野派との様式の混交などを指摘する。第三部「武家の物語絵画—平家絵・合戦絵・御伽草子絵」は、大名家のコレクションに武家が活躍する物語が収蔵される状況を重視し、平家絵、「酒吞童子絵巻」などを扱い、鑑賞状況に応じた画面形式の違い、清和源氏のゆかりや忠孝という価値観の重視、女訓としての性質に論をおよぼす。第四部「尾張徳川家の物語絵画コレクション」は、絵草紙屋による「文正草子絵巻」、同家伝来の「八幡大菩薩像」、徳川義直と家族が描いた貝合絵などを検討し、先行作品を利用した作画や絵草子屋の工房の実態、表と奥の道具のありように迫る。終章は、階層化の図式を示し、改めて 17 世紀の絵画をとりまく状況を整理し、今後の課題を述べる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、課程博士の学位請求論文ながら、実質的には申請者のおよそ 30 年にわたる調査研究の成果が結実し

たものであり、多くの作品を造形的特徴に即して、また大名家の絵画需要と結びつけて丁寧に検証し、17 世紀の物語絵画の豊穡さを解明する内容となっている。

第一に、「階層化」という概念のもと、個々の作品に従来の画家、画派中心の研究を越えた位置付けを与え、それらの分析を通じて物語絵画をめぐる状況を、大名家が持つべきものを整え、制作者がそれに応え売れるものを制作した結果とみなし、当時の絵画界を見渡す新たな見取り図を提示した。

とりわけ、作品の数で言えば圧倒的多数を占めるものの逸名の絵師によるためこれまで看過されがちであった絵草紙屋の作品を扱い、徳川美術館「文正草紙」を最優品として類似した様式による絵巻を 20 点弱見出し、それらが同一の工房によること、伝来および画材や表現に基づき大名家の御用として制作されたとみなせること、先行作品の図様や物語本文との対応を踏まえて図様調整や構図選択の具体相を説いたこと、また、徳川家綱の治世における絵画に対する価値観を反映している可能性を示したことは特筆される。また、絵草紙屋の仕事の把握により、制作者階層の最上層である狩野派や土佐派といった正系絵師の作品の規範性を逆照射的に示した点も重要である。

第二に、物語絵画とその媒体となるフォーマットの関係を検討し、各フォーマットの特性や機能を明確に論じた。たとえば扇面というフォーマットを、小さな画面、折り畳み可能、表裏に絵を描くことができるなどの特殊性を有するとし、先行作品の図様がその特徴ある形態にどのように収められていくのかを追い、物語絵画から新たな物語絵画が生成される過程、フォーマットに応じた絵づくりを検証した。また、前時代の小画面絵画による図様の流布が版本挿図という新たな媒体へと集成される、あるいは版本挿図の影響を受けて新たな作品が生まれること、そして特定の画派を越えた画家の存在がそれに関わることを説く。

第三に、物語絵画を扱うことから文学史にもわたる成果でもあり、今後の文学と絵画の関係の研究、そして文学研究に寄与するところも大きい。各作品単一での考察に編重しがちな文学研究においては難しい主題（作品）横断的な内容であり、本論が示す大名家の需要、物語絵画の機能という視点から文学作品を見直すことは新たな文学作品研究の道を拓くことにつながる。

また、多くの作品の検討に基づき、この時期の物語絵画として選ばれる主題、場面、図様、あるいは清和源氏とのゆかりなどの機能を指摘したことを通じて、それら物語絵画の制作が新たな「古典」の創出でもあることを明示した。

第四に、尾張徳川家ゆかりの絵画を、同家伝来の作品を所蔵する徳川美術館での勤務経験を踏まえ、蔵帳や箱書といった作品に附属する情報にも十分な目配りをした上で、制作の実態、機能、当時の大名家で共有されていたやまと絵、物語絵のバリエーションとの関わりにおいて説明した。大名家の絵画収蔵の状況は家により違いが大きいと考えられるが、徳川家という主軸の把握は、当時の武家における絵画コレクションの形成と物語絵画の関わりを検討する上での基盤として注目される。

以上の通り、本論文は中近世の物語絵画ひいてはやまと絵の研究において、質・量ともに従来の研究を大きく凌ぐ充実した内容である。そして、この時期の多彩な作品を理解するための指標、考察のモデルを提示しており、今後の近世絵画史研究の進展に寄与するところ甚大である。

敢えて言えば、17 世紀物語絵画として重要かつ大名家との関わりが明確な岩佐又兵衛の古浄瑠璃絵巻群および絵草紙屋と通じる扇屋であったとみなせる工房制作の様態について研究のある俵屋宗達の作品群についてまとめた考察がない点は惜まれる。また、階層化について時期、時間の問題を加えた想定が望ましいこと、物語の絵とともに書の書風や書写者にも留意が必要であることなど、さらなる課題もある。しかし、それらの点も本論文の価値を大きく損なうものではない。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。